

容り法再改正に向けた連続学習会 第6回開催報告(要点)

日時 2010年2月19日(金) 14:00~16:20
場所 主婦会館プラザエフ 3F
講師 公文正人さん(社団法人全国清涼飲料工業会専務理事)
テーマ 清涼飲料業界の3R推進状況

事業者による3R推進に向けた取り組みや、主体間の連携に資する取り組みの状況について、約1時間にわたって詳細に説明していただきました。そのエッセンスをご紹介します。また、意見交換でも貴重なご意見を伺うことができましたので、最後にその要点を掲載しました。

【講演内容】

清涼飲料の容器別生産量の推移

缶、びんからPETボトルへ大きくシフト。一方、紙容器も増加傾向。

2008年の容器別構成比は、PETボトル63%、缶22%、紙容器11%、びん2%、その他容器2%。

リデュースの取り組み

<軽量化・薄肉化等による使用量削減> (3R推進団体連絡会の自主行動計画フォローアップ報告)

素材	2010年度目標(2004年度比)	2008年度実績
ガラスびん	1本あたりの平均重量を1.5%軽量化	1本あたりの平均重量を1.4%軽量化
PETボトル	主な容器サイズ・用途ごとに1本あたりの重量を3%軽量化	主な容器サイズ・用途15種のうち13種で0.1%~11.0%軽量化
紙製容器包装	2%削減	1.3%削減
プラスチック製容器包装	3%削減	事例として把握した削減量1,375トン 原単位改善効果の換算値12,856トン
スチール缶	1缶あたり平均重量で2%軽量化	1缶あたり平均重量を2.0%軽量化
アルミ缶	1缶あたり平均重量で1%軽量化	1缶あたり平均重量を0.8%軽量化
飲料用紙容器(アルミなし)	重量を平均1%軽量化	現状維持
段ボール	1㎡あたりの重量を1%軽量化	1㎡あたりの平均重量を0.9%軽量化

PETボトルで2004年以降最も軽量化が進んでいるのは無菌充填ボトル。

アルミ缶の場合は、薄肉化は限界に達しており、口径を小さくするなど小技で対応。

飲料用紙容器(アルミなし)の軽量化は、極めて困難だが、研究中。

容器包装の中で総重量が桁外れに大きい段ボールについては、薄手のCフルートへ切り替え中。

<軽量化の事例：PETボトル>

アサヒ飲料 十六茶 2000ml 43g (57g)

サントリー 天然水 2000ml 40g (47g)

大塚製薬 ポカリスエット 500m 18g (27g)

日本コカ・コーラ い・ろ・は・す 520m 12.5g

リユースの取り組み

<環境省のPETボトルのリユースとワンウェイのLCA分析に参加>

CO₂排出量は、リユース（宅配販売・地域限定）<ワンウェイ<リユース（店頭販売・広域）

<欧州でのPETボトルリユースの状況>

主要なシステムとして残っている国は、ドイツのみ(ただし、2008年の清涼飲料での構成比は13.6%)、
わずかに残っているのは、オランダ、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、スウェーデン。
スイスは、LCA調査結果に基づき、2003年にワンウェイPETボトルに転換。

<リターナブルびんポータルサイトの開設>

ガラスびんリサイクル促進協議会は、2009年2月に「リターナブルびんポータルサイト」を開設、大手、中小企業のリターナブル商品を紹介。

<リターナブルサイダーびんの開発>

全国清涼飲料協同組合連合会が2008年度に共用リターナブルサイダーびん（内容量340m）の製造を開始、現在5県（青森、岩手、福井、兵庫、徳島）の地サイダー事業者が使用。地域の中小企業は、缶は使えないので、リターナブルびんを使つての地産地消に活路を求めています。

リサイクルの取り組み

<リサイクル率・回収率等の維持・向上>（3R推進団体連絡会の自主行動計画フォローアップ報告）

素材	指標	2010年度目標	2008年度実績	2004年度比較
ガラスびん	リサイクル率 (カレット使用率)	70%以上 (75%以上)	66.5% (73.8%)	- -
PETボトル	回収率	75%以上	77.9%	15.2ポイント
紙製容器包装	回収率	20%以上	14.2%	1.2ポイント
プラスチック製容器包装	収集率	75%以上	59.0%	17.4ポイント
スチール缶	リサイクル率	85%以上	88.5%	1.4ポイント
アルミ缶	リサイクル率	90%以上	87.3%	1.2ポイント
飲料用紙容器(アルミなし)	回収率	50%以上	42.6%	8.3ポイント
段ボール	回収率	90%以上	95.6%	7.0ポイント

<世界のPETボトル回収率>

2008年度では、欧州の46.0%、米国の24.6%に対し、日本は77.9%と世界最高水準をキープ。

【質疑応答】

Q 資源の視点から、清涼飲料容器の将来動向について。

A 石油由来のPETボトルは、石油資源の制約があり、植物由来のものへある程度置き換えられていくでしょう。サトウキビの廃糖蜜から製造したPETボトルで5%~30%置き換えることができるといわれています。また、ボトル to ボトルのリサイクルも増えるでしょう。一方、アルミ缶、スチール缶も資源は有限です。ガラスびんは、資源は無尽蔵に近くあるが、利便性が悪く未知数です。これに対し、端材を利用する紙パックは、資源は豊富にあり、徐々に伸びています。

Q 小型PETボトルは、このまま増え続けるのか？

A 店頭では割安感のある大型PETボトルへ、自販機では缶へのシフトが起きています。

【3R全国ネットの問題提起をめぐっての意見交換】

容り法が施行されても、容器包装を含むごみは10%も減っていない。

公文さん 環境省資料を用いて推計すると、生活系ごみの中の容器包装は、容り法が施行されてから12%減少しています。

ガラスびん、PETボトル、紙製容器包装については、事業者の再商品化費用負担がほとんどない。

公文さん ガラスびんは再商品化委託単価が比較的安く抑えられており、紙製容器包装は市町村からの再商品化申し込み量が少ないため。再商品化委託費用以外に、PETボトルでは2008年度の有償入札分として市町村へ約45億円が支払われ、また、2008年度には、市町村へ約95億円の合理化拠出金が支払われました。再商品化事業の高度化・効率化により、事業者と市町村は、win-winの関係になっているのではないかと。

リユースびんが衰退したのは、ワンウェイびんにだけ税金が使われ、公平な仕組みになっていないからだ。

公文さん 中身事業者の基本的立場としては、中身を売るのであって、容器代は価格に転嫁すればよいのだから、容器を選ぶ必要はありません。リユースびんが衰退した要因は、消費者に買ってもらえないこと。一定のロットを売り切る見込みがなければ製造できない。びんが戻ってこないこと。リユースびんは高価なので、保証金では元が取れない。

事業者(びん商) リユースシステムは完全に崩壊し、元に戻すことは不可能。最大の原因は、消費者がリユースびんを買わなくなったことにあります。

市民A・B 現状は、ワンウェイに有利な仕組みになっています。リユースびんが広がるためには、まず、その仕組みを変える必要があります。

市民C 業務用や生協の宅配、地場産業などでは、まだリユースびんが残っています。これをじわじわ広げていくことが必要です。